

# もはやその姿は家庭では見られない

## ー安全マッチー

### ■マッチの誕生

マッチが誕生したのは1827年、イギリスの薬剤師であったジョン・ウォーカーで、頭薬に「塩素酸カリウム」と「硫化アンチモニー」という化学物質を使用し、摩擦によって発火する「摩擦マッチ」を考案した。その後、小箱の側薬に擦り付けて着火する安全マッチが1855年にスウェーデンで発明された。

日本で始めた製造されたのは、1875年(明治3)である。1878年に輸出が始まり、明治・大正時代にはスウェーデン、アメリカと並ぶ世界3大マッチ生産国となった。現在、国産マッチの大半は兵庫県の姫路市で生産されている。

マッチの種類にはボックスマッチが主で、10本入りの小箱マッチから平均20～40本の並型(普通)マッチ、800本以上入りの徳用(家庭用)大箱マッチまである。マッチ軸が紙製のブックマッチもあるが、点けるには慣れないとコツがいる。箱は1940年代までは外箱、内箱ともに経木(きょうぎ)製だった。経木とはスギ・ヒノキ等の材木を紙のように薄く削ったもののこと。1950年代に入ると引き出しは紙製に切り替わり、同年代後半になると外箱も紙製になった。

大正から昭和30年代ごろまでマッチラベルのコレクションは大流行して、10万枚、20万枚集めたという人もいた。ラベルコレクションは広告マッチが主で、旅館、ホテル、ピアホール、スナック、パチンコホール、純喫茶、銀行、百貨店、そば屋、寿司屋、レストラン、電気店、ガソリンスタンド等々。1960年代の高度成長期には広告マッチを作らなかった業種はないほどで、多様なデザインの広告マッチを配布していた。持ち歩いているマッチや友人の部屋の棚に並べられたマッチを見ると、その人の行動範囲や生活嗜好が分かったものである。

### ■家庭から姿を消したマッチ

昭和50年頃から使い捨てライターやガス機器の自動点火装置の登場の影響で、今や生活必需品でなくなっている。わが家(筆者)からマッチが消えたのはいつ頃だったか考えると、三男が5歳の時に、仏壇にあったマッチを持ち出し、子ども部屋で「火遊び」をしていて畳を焦がしたことがあった。以来、わが家でマッチを使わない、置かないことにした。

私が三男と同世代の昭和30年代、自宅の茶筆筒に必ず徳用マ



広告マッチ、商用マッチ (名古屋郷土二輪館蔵)



台所の必需品だった安全マッチ



徳用大箱マッチ (名古屋郷土二輪館蔵)



ブックマッチ (名古屋郷土二輪館蔵)

チが置いてあった。当時のわが家は岐阜の山村

で囲炉裏があった。土間の奥にかまどがあり、母はご飯を炊いていた。私は母が毎朝マッチを使っていた記憶がない。早朝、母はまず囲炉裏から種火を灰からかき出し、油分を含んでいる乾いた松や杉の葉で火をおこし、その火をかまどに持っていった。徳用マッチであっても、マッチは貴重品であった。

(富成一也)